

臨床心理学の教育

中 田 行 重

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室
E-mail: nakata@po.cc.toua-u.ac.jp

下 川 昭 夫

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室
E-mail: akios@po.cc.toua-u.ac.jp

更 科 友 美

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室
E-mail: sara@po.cc.toua-u.ac.jp

1. 臨床心理学への注目

近年、教育現場や職場、その他様々な人間関係の場において、以前には余り目立たなかった社会的な問題が増加していることを多くの人が感じている。教育現場では不登校児は依然として大きな問題であるし、また自閉症や多動児などという従来からの情緒障害の診断基準では分類しがたい子ども達が増えている。一時、かなり注目を集めた学級崩壊を起こす子ども達だったが、それ以外にもどこか気になる子ども達が増えていることを筆者らの周囲の現場の先生方も感じている。そのため、精神医学では、ADHD (Attention Deficit Hyperactive Disorder、注意欠陥多動障害)、LD(Learning Disorder、学習障害)、高機能自閉症、アスペルガー症候群などの概念が注目を浴びるようになってきた。しかし、診断基準が精緻になったからといって教育現場の問題が減った訳ではない。実際、筆者らが見聞きしたり大学院生を指導した事例を見ると、上記の診断のどれにも当てはまらないと思われるようなタイプの子どもの達がいることを感じさせられる。一方、問題は子ども達だけではなく、子どもを取り巻く教師や親な

どもにも起こっている。土曜日が休日になったことにより、教師は教科内容をゆとりを持って教えられなくなり、その他の行事や研修などの仕事が増えるなど、労働状況は険しいものになっている。その上、上記のような子ども達に対しては“カウンセリング・マインド”をもって対応することを求められる。また、子どもの問題について親と共に考えてゆこうとしても、その親がやはり以前にはいなかったような“どこか気になる”親であるために対応に苦慮するケースも増えている、ということも筆者らは周囲の先生方から聞いている。また、そのような教師から見て“どこか気になる”親でなくても、かつてのように地域全体で子どもを育てる、という風潮がなくなっている今、親は子育てに戸惑い、人間関係が希薄化し、子育ての不安をひとりで抱え込んでいる場合が多い。

職場では、人間関係をうまく処理できない上司がうつ病になることもあれば、部下もうつ病になる。価値観が不安定で流動的な現代、自分の今の仕事が本当に自己実現に結びつくものかどうか分からない。長引く不況のもとで何一つ有力な手立てがとられたために、社会全体で収入が減り、リストラの嵐が止まない。その結果、家族関係が不安定になる。

これは現代社会で起こっている人間関係の問題の一例に過ぎない。その他にも多くの問題が起こっている。臨床心理学が注目を集めている理由の1つには、このような問題へのアプローチとして期待されているということがあるように思われる。

また、一方で生活は便利に豊かになっているのに、環境破壊や世界各地の戦争に対して有効な対応策がとられず、世界が滅びる危機がどうやら現実のものらしいと多くの人々が感じつつある。わが国日本もこのところ戦争への道を開くための法律整備が進んだり、経済政策がさっぱり効を奏しないなど、様々な面から将来への不安が人々の心を意識、無意識の両面で暗くしている。先行きの不安定に対して心を支えてくれるものとして確固たる宗教や価値観、あるいは地域のつながりが無い。

このような、漠然としているが、どこかで確かに進みつつあることを感じさせる、先行きの暗さからくる不安定のためであろうか、その不安定な自分への対応、あるいは救いを求めるためであろうか、臨床心理学を学ぼうとする人々が近年増えている。

2. 現代における臨床心理学教員の大学における立場

臨床心理学を学ぶ場としては大学やカルチャーセンターや地域の様々な研修の場などがあり、いずれも人気がある。特に大学における臨床心理学、あるいは心理カウンセリングへの人気はここ数年、大変高く、大学の中で臨床心理学を学ぶ学生数が突出して増えている。そのことが学内全体で教員間での問題を引き起こしている。あるいは心理学科の中でさえ、実験系と臨床心理学系との間で対立を引き起こしている大学もある。つまり、社会全体の問題が大学における臨床心理学の位置付けの問題になって出てきているのである。また、少子化で入学者確保が最優先課題となっている大学の経営者サイドが臨床心理士養成の指定校を作って、それを大学の看板として生き残りを図ろうとする

こともあるかもしれない。国公立大学を定年退職したような教員を2名と、大学院を出たばかりのような若手の教員を2名集めて「ハイ出来上がり」というように大学院を作っているように見える所もある。そのようにして集められた臨床心理学の教員は、学内で人寄せパンダとして多くの仕事を課される割には、ねたまれ、利用され、対立の渦中に投げ込まれ、そして、その仕事の多さを評価されなかったりするというようなことが多くの大学で起こっていることを筆者らは個人的に耳にしている。

一方で臨床心理学の教員としては、人的リソースが十分でないにもかかわらず、多くの学生の相手をさせられることになる。このように臨床心理学の大学院は今、多くの大学において、その大学の広告塔としての役割を負わされている。ところで臨床心理学の大学院における教育は臨床心理士という社会的な資格を目指すものであるため、高度な臨床心理の知識や技術のみならず、学生の自覚や社会性の育成などを含めたものになる。従って、実際に指定校として課された講義科目数も多いが、それに加えて個人的な接触や個人的なスーパービジョン、それも場合によっては教育分析に近いことをすることが必要になる。また、第一種指定校の場合には学内の外来の相談センターで大学院生が臨床心理の実務を行うことが求められている。大学院生は電話受付からインテーク、そして担当者への連携、カルテ管理などの実務を全て行い、その上で臨床心理面接を行うのである。こうしたことを新たに入学した院生は一から身につけてゆかねばならない。しかし、これらのことは、もし既存の相談センターをもっているような伝統のある臨床心理の大学院であれば、院生は先輩のする様子を見るだけで体験的に容易に覚えてゆくことの出来るものである。伝統の中で作り上げられた習慣あるいはシステムには、それまで関わってきた多くの大学院生や教員達の知恵が凝縮されている。そのような環境にいる大学院生は、実際の業務をこなす先輩の様子をみるだけで、そのような様々な知恵をも同時に吸収することが出来る。ところが、臨床

心理の人気に乗かって人集めのために設置された大学院のような場合、多くは相談業務の既存のシステムやその大学院出身の頼れる上級生やOBをもっていないために、教員はそれぞれ、その業務のABCから手取り足取り大学院生に教えなければならない。これらの仕事は煩雑で地道でかつ膨大であり、エネルギーを使う。その上、このような雑務的に見える地道な仕事と上記の個人的スーパービジョンの類はその膨大な時間と労力とその重要性の割には、担当講義コマ数としてカウントされないし、研究業績にもならない。このような事情は新設の臨床心理学の大学院の多くにおいて多少なりとも共通している。

このように、臨床心理学の大学院の教員は地道で膨大な仕事をするようになる。ところで、近年の臨床心理学の大学院が増え続けるという状況では、今後はその教育の質の競争になる。これらのことを考えると、臨床心理の教員は大学院の教育に専念すべきであると言えるだろう。ところが、臨床心理学の教員は大学院だけでも大変なのに、学部の仕事も任せられることが多い。つまり、臨床心理の大学院は人集めのために作られているので、その臨床心理の大学院がある、ということを経由して入学してくる学部生が多い。そして、教員は彼らへの教育も担当させられるのである。これも地道で膨大な仕事である。

臨床心理学教員が学部生に対して講義することを求められるのは当然であるが、学生が専門課程に入り、臨床心理学研究室に所属するようになると、個人的な接触も行わなければならない。この“個人的な接触”とは学業や進路、就職についての相談は勿論のこと、自分自身の性格や対人関係の悩みについての相談も含まれる。特に臨床心理学の教員はその点についての専門家として認知されているため、そうした問題の相談を受け易い。そのような場合でも、学内の学生相談が充実している大学は、そちらに学生を紹介することが出来るが、それが出来ない大学では教員がほとんどカウンセリングのように定期的に長時間の相手をすることもある。

もちろん、これほど濃密な関わりが必要な学生は若干名に過ぎない。とはいえ、臨床心理学専攻の研究室に所属する学生数が増えると、個人的な接触も当然多くなる。その上、所属学生についての細々とした雑務についても、数が多い分、仕事量も確実に増えてくる。その学生の就職のことなどでも、人数を沢山抱えているだけに、指導教員の苦労は大変なものであると聞く。つまり、今の臨床心理学の教員は学部でも仕事が大きく膨らむのである。

このように大学院の仕事と学部の仕事で臨床心理学の教員は手一杯になっている。それでも、大学側にその両方を結び、仲介するような配慮があれば、幾分かでも仕事はし易くなる。ところが、両方が独立している場合は、大学院と学部の行事や時間割が重なることもある。こういう問題は大学側がきちんと対応してくれないことには、教員はお手上げである。委員会活動や会議などの仕事も2倍になる。その上に通信制大学院の担当教官や学生相談室のカウンセラーというようなシステムの異なる仕事が増えたりすると、身動きが取れなくなる。

3. 学部生に対する臨床心理学教育

このような労働環境のもとで臨床心理学教員が学部生相手に行う教育は、どのようになるだろうか。これは大学によって事情が異なるし、教員の臨床心理学観によっても異なるので、様々な考え方があり得るだろう。ここでは筆者らの所属する東亜大学の場合を考える。

時間的にゆとりがあれば、きちんと理論の基礎からじっくりと教え、積み重ねてゆきたいところである。しかし、このような状況では、そのようなことは可能でない。そうすると、頼りになるのは何か？ 筆者らは学生自身の持っている自発性である、と考えている。学生は臨床心理学に何らかの意味で関心をもって大学に入学してきている。その関心を活性化することで、学生が自発的に学ぼうとする意欲が出てくれば、自学自習してゆくことになる。そのことは、講義という受身的な学習よりもはるかに、

能動的なものである。もちろん、多くの学部生にとって勉強とは、ほんの少し前までは高校や予備校で決まりきったことを与えられ、理解し、記憶することであった。そのような学生が能動的に学習するには多少の困難も付きまとうであろうし、時間的な経済の観点からはエネルギーの浪費になる場合もあるだろう。しかし、沢山の無駄を重ねて初めて効率的な学習が出来るようになると筆者らは考えている。そして、多少の困難やエネルギーの浪費があっても、それを何とか克服してゆこうとすること自体が、学生にとって大きな体験であり、財産になるとも筆者らは考えている。

ではその臨床心理学への関心を、実際の学習行動に移してゆくには、どのような動機付けの過程が必要であろうか？ 筆者らの経験では彼ら／彼女らの関心を直接尋ねて言語化させようとしても、難しい。それは彼ら／彼女らの言語化能力が未発達であることにもよるであろうが、それよりも、その“関心”がマスコミで注目されがちな事件にあるなど、臨床心理学への漠然としたイメージからきているためであることが多いようである。筆者らが学生相手に臨床心理学の実践について話をすると、彼らの抱いていた過大な理想像が崩れ、それによって希望していた臨床心理士への道を捨てる学生もいる。そのことは大学の経営サイドにとっては痛手であることを筆者らは承知しているが、やはり学生の考えを尊重すべきである、と考える。

では、学生の“関心”をどのようにして学生自身にとって明確なものにするにするか？ 筆者らは、臨床心理学的な体験をすることである、と考えている。実際の臨床心理の業務を学部生にさせることは許されない。では学生が可能な体験にはどのようなものがあるか。大きく3通りが考えられる。1つは心理臨床の疑似体験である。もう1つが実際の援助体験、すなわちボランティア活動である。そして、もう1つが学生自身の対人関係の探索を体験することである。

1つ目の心理臨床の疑似体験には様々なものがあり得る。筆者らがこれまで行ってきたもの

としては、トライアルカウンセリング、心理テストの被検者体験、催眠、自律訓練、フォーカシング、エンカウンター・グループなどである。すなわち、これらは実際の心理臨床にも使われてはいるが、クライアントや患者ではない一般の人の精神衛生や健康のためにも用いられている方法である。こうした方法を実際に施行者となって相手にやってみることは、心理臨床家側に立って疑似的な体験をすることになり、逆に被施行者としてやってもらうことは、患者やクライアントとしての疑似体験をすることになる。

もう1つのボランティア活動は、老人や障害を持った子どもやその家族、不適応の子ども、保育園児、学童保育児などに対する援助活動である。それは、既存のボランティア団体に参加して様々な援助を行うという形態をとることもあるし、老人ホームや特別養護老人施設、養護学校、保育所、学童クラブなどの機関に入ってお手伝いをするという形態をとることもある。これらの活動は、従来の心理臨床の援助に比べ、ソーシャルワーク的なことも含む幅の広いものである。これらの活動をすることで、心理臨床にこだわらない援助の在り方を体験的に学ぶことになるし、援助職の実際を体験することにもなる。筆者らの1人、下川はそのためにボランティア希望の学生とボランティアを必要としている学外の人達をつなぐネットワーク、「ママネット」および「ボルネット」を考案し、創設した（下川、印刷中）。

もう1つの学生自身の対人関係の探索の体験とは、学生が大学というコミュニティに適應することや、集団における自分自身を見つけるための体験である。これは換言すると、グループワークを通して、他の学生と付き合えるようになったり、他の学生と触れ合うことで世界が広がるということを目指すものである。典型的にはエンカウンター・グループやそれに類するグループワークを行うこと、あるいは、班活動、研究会活動など、目的を共有する仲間のグループ単位で一つの作業を行うことである。筆者らはエンカウンター・グループが学生の対人関係

作りの援助になることを見てきた（村山ほか 2001、下川ほか 2001）。これには、筆者らが大学院の教員でもあることから、大学院生を先輩として学部生とのつながりを橋渡しするようにした。大学院生を含めたグループワークをすることで、年齢の違う人達との交流を図ることも出来た。

筆者らは、上記の3つの体験の場を出来るだけ設定するように努めてきた。結果的に見ると、筆者らの労働量が減ったとは必ずしも言えない。しかし、多くの学生が内発的に動機付けられて動き出すことは、どうやら確かなようである。筆者らが少し助言やヒントを与えることで、学生は研究会を立ち上げるようになったし、外部へボランティアに出かけてゆくようになった。また、エンカウンター・グループなどを自発的に企画するようになった。また、院生とのつながりも出来るようになってきた。

研究会で取り上げるテーマは講義で取り上げられるものもある。講義を聞く前にその研究会に所属した学生は研究会での学習が講義の予習になっているし、講義後に研究会で同一のテーマを扱うときにはそれが復習になっている。しかし、講義の予習や復習といったことよりも、自分自身でそのテーマに取り組もうとする自発性こそが重要であろう。実際、彼／彼女らは生き生きと取り組むようになった。平成14年度の大学祭（10月25日～27日）における研究室主催のポスター発表にも大変意欲的であった（中田ほか、印刷中）。「自分たちが大学の主役」という雰囲気をも多くの学生がもっていた。そして、各自が自分で取り組もうとすることで、講義で受身的に聞くよりも、そのテーマについての情報を、自分の手で探ったという確かな把握感をもって吸収することになる。

4. 今後に向けて

体験的な学習が臨床心理学専攻の学部生にとって意味がありそうであるという感触は得た。しかし、課題もある。それは、大きく以下の3つである。

1つは体験がどの程度、深まりのあるものか、についてである。その点については未だ筆者らは十分な確信を得ていない。これはもう少し時間を待つべきものなのか、あるいは筆者らの促し方の問題なのか、あるいは学生の問題なのか、考えているところである

もう1つは、体験学習と通常の講義形式、あるいは演習形式とのバランスである。これは、シラバスに記載される形式のことを意味しない。本学のシラバス上では現在のところ、臨床心理関連の科目を「体験学習」とシラバスに記載することはない。したがって、シラバス上で「講義」「演習」であっても、学習の効果や教育の必要性によって、「講義」や「演習」の中で体験をしてゆくことになる。筆者らがここで問題にしているのは、その場合にいわゆる講義や演習の形式と体験学習の形式の適切なバランスがどのようなものか、である。筆者らとしては学生が自分で学ぶことの難しい知識はやはり講義の中で解説し、理解を深めてもらうべきであると思っている。しかし、その知識が単に受身的に義務的に記憶されるものであれば、その知識は生きたものにならないであろう。そこに体験的学習の意味がある。そのブレンドの具合をどのようにするかは今後の課題である。

もう1つであるが、体験の場の確保や学外体験に関する問題である。たとえば、学内でエンカウンター・グループをしやすいスペースとしては、靴を脱いでくつろげるようなフリースペースが良い。しかし、本学でそれができるのはコミュニティセンターの4階のみであり、気楽に使うことが難しい。また、学外で行うボランティアや学外から講師をお招きするような場合である。今のところ、データを取る目的でこられた心理臨床の実践家や、研究会メンバーの友達の看護婦などを外部からお招きした。また、ボランティア活動の代表などがお見えになった。しかし、そうした外部からの講師に対して何らかの謝礼をさし上げることが現在の研究費額やシステムでは難しい。また、体験の場としてのボランティア活動の拡大や、エンカウンター・グループを行う宿泊施設の確保、他大

学との交流なども進めてゆきたい。外部との接触に関するもう1つの課題は学生の社会性の教育についてである。外部施設で体験させてもらう場合など、その施設独自の方針や規則があり、それらを守らなければならないし、社会的な常識も身につけなければならない。実はこの社会性の獲得は外部で学べる大きな体験であるが、それらについてのガイダンスが必要と思われる学生もいる。こうした学生への教育をどうするかも今後、検討の必要がある。

引用文献

- 村山正治・下川昭夫・中田行重・鎌田道彦・田中朋子(2001) 臨床心理学の体験的教育としてのエンカウンター・グループ——大学生の対人関係の促進効果もふまえて——『総合人間科学(東亜大学総合人間・文化学部紀要)』1:81-91
- 中田行重・下川昭夫・更科友美(2003)「臨床心理学研究室の2002年大学祭発表ポスター」『総合人間科学(東亜大学総合人間・文化学部紀要)』3.
- 下川昭夫・深津典子・村山正治・中田行重・澤井万七美・鎌田道彦・天野裕子・上藺俊和・向野ミチ子(2001) 大学生の仲間づくりに対する支援の試み(2)『東亜大学臨床心理相談研究センター紀要』1:53-62
- 下川昭夫(印刷中)「ママ・ネットとボル・ネット——個人臨床から地域臨床へ——」『東亜大学臨床心理相談研究センター紀要』3.